

2025 年 7 月 6 日 聖霊降臨節 第 5 主日礼拝

メッセージ「口先ではなく態度で示す」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネの手紙 I 3 章 11 - 18 節

今日も、前回に引き続き、「ヨハネの手紙」を読みました。冒頭 11 節には「互いに愛し合うこと、これがあなたがたが初めから聞いている教えです」とありますが、これは「ヨハネによる福音書」の中に何度も登場する言葉です。「互いに大切にし合いなさい。これこそが、私の掟である」(15:12、17)。また「ヨハネの手紙 I」の 4 章には、「神は愛です」(7-8、16)という有名な言葉もあります。これらの美しい言葉は、書道でもよく書かれて、教会にも美しい書が掲げられていることがあります。ですが、私たちはこの言葉を読む時、この「相手を自分のように大切にする」という「愛」を、ある特定の仲間同士の中にだけに限定して、読んではいないように思います。

しかし、「ヨハネ福音書」にせよ、「ヨハネの手紙」にせよ、歴史的にはこれらの文書の本来の意図は異なりました。これらの文書が書かれた時代は、ユダヤ教との対立が激しく、既存のユダヤ教から、「ナザレのイエス派のお前たちは、自分たちとは異なる」と言われて、その会堂から追い出されていった時代でした(ヨハネ 9:22, 12:42, 16:2)。そのような時代の中で、ヨハネの福音書や手紙を記した人々にとっては、「いじめられている自分たちと、自分たちをいじめている側の人たちとは、何が違うのか。自分たちはいったい何者なのか」ということが、大きな関心事になっていました。そのようにして記されたのが、ヨハネの福音書や手紙であるわけですので、厳密に読みますと、そこに書かれている「きょうだいたち」や「仲間たち」という言葉で表されているのは、自分たちの身近な仲間うちだけであって、もちろん自分たちを迫害する側の敵対者たちはそこには含まれておりません。

そのように「私たちは救われますが、私たちをいじめているあなたたちは救われませんよ」と言いたくなる気持ちも分かる一方で、果たしてそれが本当にイエス様の心、気持ちや考えと同じなのだろうか、とも疑問に思います。「敵を愛し、迫害す

る者のために祈りなさい。～天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(マタイ 5:44-45 並行)と気前よく言われたイエス様が、本当に反対者たちを憎むようなことを勧めるだろうか。時の権力者たちに都合の悪い政治犯として、逮捕され十字架にかけられていったイエス様の生き様を見ても、決して「仲間だけを救い、反対者たちを憎んでいた」というわけではなかったことが明らかです。ですから、イエス・キリストの言葉と振る舞いを知る私たちは、独善的で排他的ともいえるヨハネの福音書や手紙を、そのようなイエス様の視座から読み、受け止め直していきたいと思います。

11 節から、「互いに愛し合うこと」、「お互いに大切にし合いなさい」という、最も大切な教えが提示されています。続く 12 節からは、「創世記」4 章に出てくる、人類最初の兄弟であるカインとアベルのお話が言及されています。聖書の冒頭に、最初の人間であったアダムとエバの子であるカインが、弟アベルを殺したという人類最初の殺人事件が記されていますが、その理由は、「カインが悪で、兄弟アベルは正しかったからだ」と述べられています。聖書の中で、「悪」というのは、力の強い者から弱い者への「抑圧」を伴うものであり、一方で「正しさ(義しさ)」とはそのような抑圧からの「解放」を伴うものでした。カインにとっては、アベルのそのような姿勢や生き様が、うるさく目障りに映ったのでしょう。「お互いに大切にし合う」ことを目指すのであれば、「自分こそが正しい。正解を持っている」と言って、「上から目線で、高圧的になってはいけない。それでは誰もがカインの二の舞のようになってしまう」ということを戒めているのだと思います。

15 節にも、「きょうだいを憎む者は皆、人殺しです」という非常に強い口調での戒めが述べられています。そして、「人殺しは皆、その内に永遠の命をとどめていない」とも続いています。ここで言われている「永遠の命」とは何かというと、「ヨハネによる福音書」17 章 3 節にちゃんと「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」と記されています。天の神とイエス・キリストの心、言葉と生き様を知り、それに倣うこと、それを自分自身の生き様とすること(身をもって知ること)、それこそが「永遠の命」を生きるということであり、そのように生きている人は当然「兄弟を憎む」ことも

「人を殺したり、抑圧して害したり」もしない、というだけのことです。

14 節には「私たちは、自分が死から命へと移ったことを知っています。きょうだいを愛しているからです」ともあります。いわゆる「鶏が先か、卵が先か」の問題ではありませんが、私たちがきょうだいである隣の人を大切にできるのは、私たちが神様の働きによって、既に「死から命へ移されている」からです。言い換えるならば、死や滅びに向かう道から、互いに活かし合う命に向かう道へと、もう既に移されているからです。「隣の人を大切にしたい」という思いが与えられていること、それ自体が神様が共に働いてくださっていることに他ならないということでしょう。

自分自身が大切にされた経験がある人は、自然と「自分も他人のことを大切にしたい」と感じるのだらうと思います。16 節にある「御子は私たちのために命を捨ててくださいました」というのは、「ヨハネ福音書」15 章 13 節にある「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という言葉と同じ言葉です。「捨てる」と聞くと、乱暴に聞こえますが、元の意味は「置く(ティテーミ)」ですから、「命を差し出す」「命をささげる」「命を費やす」ということでしょう。

そして手紙の著者は、最後に読者たちに対して「言葉や口先だけではなく、行いと真実をもって愛そう」(18)と呼びかけています。この言葉を聞いて思い出すのは、子どもたちもよく知っている「幸せなら手を叩こう」という歌です。あの歌の中でも重要なフレーズとして、「幸せなら態度で示そうよ」というものがあります。口先だけでなら、何とでも言うことが出来る。でも本心ならば、態度や行動でも示せるはず。態度や行動で示すことが出来ないなら、それは偽物ではないか。だからこそ、嬉しいという気持ちも、楽しいという気持ちも、悲しいという気持ちも、みんなで手を叩いたり、足を鳴らしたりして、態度で示していこう、という歌なのだと思います。

先日から、参議院議員選挙が公示され、全国各地で選挙運動が始まりました。今の時代に対する不満・閉塞感を、一部の誰かのせいにする。例えば外国籍を持つ人たちのせいにしたり、夫婦別姓で家族なのに別々の姓を名乗っているからだと言ったり……。とにかく誰か、目に見える形で、分かりやすく敵を作り出し、その一部の人たちを攻撃することによって、人気を得ようとする傾向が、ますます強くな

ってきているように感じています。アメリカの第二次トランプ政権もそうですし、全世界的な傾向として、あちこちで極右政党が力を伸ばしています。しかし、そのようなやり方は、短期的には数の力を得るかもしれませんが、滅びに通じる広き門であることは歴史が証明しています。一方で、救いに至る道、命に通じる門は狭く険しいかもしれません（マタイ 7:13 並行）。ですが、隣の人と「お互いに大切にしよう」ということ抜きにして、そもそも人類はこれまでも存続して来られなかったわけですし、そしてこれからも存続していくことが出来ません。

「互いに大切にしよう」そのことを、口先だけではなく、態度と行動でもって示していくように、今日もここから私たちは神様と共にあって導かれていきます。